ルイス・キャロルを探る (1)

笠 井 勝 子

Lewis Carroll の時代，19世紀のイギリスの大学は，研究者を優遇していた。その一つが，例えば，オックスフォード大学クライスト・チャーチ学寮の特別研究員（student）制度であった。O.E.D. から Langbaine（1651年）を引用すれば，「ヘンリー8世の定めによって，Dean 1名，Canon 8名，神学，ヘブル語，ギリシァ語の publick Professor 3名，student 60名，Chaplain 8名」がおかれた。Student に任命されたものは，独身でいることと聖職の資格をとることを条件に，学寮の一隅に住居を与えられ，研究者として生涯止まることができた。

Carroll は1850年5月，クライスト・チャーチに入学が決まり，翌1851年1月に自費学生として学寮に入っている。そして1852年には，彼自身の資質と Dr. E.B. Pusey の好意によって，特別研究生に任命された。20歳であった。以来，49歳の1881年10月にはその年限りで数学講師を退きたい旨申し出て，認められるが，それから亡くなる1898年までの17年間もなお，Christ Church では恵まれた住居をそのまま占有することができたのである。

Carroll，というよりも，Oxford における彼はMr. Dodgson とよばれていたのだが，その筆名の由来は，本名にあった。彼の middle-name で母方の姓 Lutwidge をドイツ語 Ludwigに読み，これを英語名に直したのが Lewis，そして Carrollは，彼の first-name，Charles のラテン語名 Carolus を英語に読み替えたものである。

数学，論理学の書きものは本名の Charles Lutwidge Dodgson で，楽しみのために書いたものには，Lewis Carroll で，と使い分けたのは，何も彼の性格の陰陽，或いはジキル博士とハイド氏の二重人格を表わす，と考える必要はない。二重人格とみるのは，例えば John Skinner で，"……he created two personalities for himself and that he lived as Charles L. Dodgson or Lewis Carroll with equal facility and enjoyment……it was through such a defence that life became tolerable for him, and that he escaped eventual illness by splitting his personality into two forms.[2)]

ここに言う eventual illness は何を指すのか。寒暖計を幾つも掛けて部屋の温度に細かに気を配り，毎日午後には18マイル[3)]歩き，治療のためよりも手入れのために，散髪と同じ程度に歯科医の元へ通い，暴飲暴食とは無縁で，むしろ昼はシェリー1杯にビスケット1杯，他は決して口にしない[4)]節制家の Dodgson であった。Eventual illness とは，Skinner を含めて，P.Schilder や W.Empson らに共通した解釈，フロイト流解釈の所産である。そこには，意表をつく奇抜さはある，が，それはまたキャロルの，シェイクスピア，ディケンズと並べられる程に評価される[5)]独自性を認めたくない Mrs. Grundy の目である[6)]。「アリス」の読者たちが彼らの解釈に納得すると思われない。

Carroll とDodgson それは二重人格を表わすものでなく，けじめをつける彼の潔癖性の表われと考えるのが，自然である。

二つの「アリス」の成功で，Carroll に会ってみたい人びとが出てくると，"This seemed to him horrible, and he invented a mild de-

ception for use when some autograph-hunter or curious person sent him a request for his signature on a photograph, or asked him some silly question as to the writing of one of his books, how long it took to write, and how many copies had been sold. Through some third person he always represented that Lewis Carroll the author and Mr. Dodgson the professor were two distinct persons, and that the author could not be heard of at Oxford at all.[7)]

Carroll が人目につくのを好み，学者 Dodgson はそれをきらった，ということではない。また，豊かな物語の語り手は目立ちたがり屋と決めてかかることもない。好奇心からひと目会いたがってくる人びとに，有名人気取りの振舞いができなかっただけである。"It is strange to me that people *will not* understand that, when an author uses a 'nom-de-plume' his object is to *avoid* that personal publicity which they are always trying to thrust upon him.[8)]

この名前の使い分けにまつわる，ヴィクトリア女王をからかったような話が，まことしやかに伝えられている。それは，アリスの物語を喜ばれた女王が "the author's next book" を所望なさる，すると届けられた本は *The Condensation of Determinants* (1866) であるとか，*An Elementary Treatise on Determinants* (1867) であった，というもの。これは勿論，まことしやかな流言で，死の2年前，1896年の *Symbolic Logic* のまえがきに添えて，Dodgson 自身否定している。[9)]

Carroll の，ものを書く下地は，どこで育くまれたか。

D.Hudson によれば，11歳の時家族でヨークシャーのクロフトの牧師館に移ってから，自分の姉妹のために，人形劇の台本を3本書いている。生涯続いた芝居好きは，その頃芽を出していた。当時，聖職にある人は劇場に足を運ばないのが一般で，高教会派の archdeacon であった父には芝居の話は一切しなかったし，一緒にロシアへ旅行したクライスト・チャーチの友人 Henry Liddon[10)] も芝居には付き合わなかった。リドンとは，宗教から絵画や建築，女性の教育に至るまで大抵の問題について意見が一致していたが，リドンは芝居を観るのは反対であった。この点に関する Carroll の考えは，A.R.H. Wright に宛てた手紙 (1892年) に明らかである。彼は '悪' と '悪用' とを区別して，酒，小説，劇場通い，娯楽，社会生活一般は，いづれも悪用される可能性はあるものの，その故に全部差し控えるべきではない。悪いものは避け，善いものを選んで読み，鑑賞し，或いは参加することこそ大切である，と考えた。これは今日聞けば何でもないことである。しかし，当時にあってはリベラルな考え方であったにちがいない。手紙[11)] の終りに，イエスが弟子たちのために捧げた祈りを引いて，"I pray not that thou shouldest take them out of the world, but that thou shouldest keep them from the evil." と結んでいる。

The Complete Works of Lewis Carroll[12)] には，短い Prologue が三つ納められている。一つは子供の頃作った人形芝居のオペラ用プロローグ，他の二つは Dr. Edwin Hatch の子供たちのために書いた家庭劇のプロローグで，戯曲は書いていない。芝居は専ら見る方であった。これに対して詩の方は，13歳の頃，弟と妹のために始めた家族雑誌 *Useful and Instructive Poetry* の第1号に *My Fairy* を載せた頃から，既に Carroll らしい機智と笑いを含ませて，これが，生涯続いてゆく。これは多分に父親譲りと思われる。彼の父 Charles Dodgson は，"one whose obvious authority and piety admit the lurking possibility of a sense of humour.…he had 'the rare power of telling anecdotes effectively'[13)]" お話を効果的に語る，類稀れな才能の持主，みるからに敬虔で威厳があり，それでいてユーモ

アのセンスをチラリとのぞかせる人であった。この父親が8歳の息子 Charles に宛てた手紙の一節がある。

'…I will not forget your commission. As soon as I get to Leeds I shall scream out in the middle of the street, *Ironmongers—Ironmongers*—Six hundred men will rush out of their shops in a moment—fly, fly, in all directions—ring the bells, call the constables—set the town on fire. I *will* have a file & a screwdriver, & a ring, & if they are not brought directly, in forty seconds I will leave nothing but one small cat alive in the whole town of Leeds, & I shall only leave that, because I am afraid I shall not have time to kill it.

Then what a bawling & a tearing of hair there will be! Pigs & babies, camels & butterflies, rolling in the gutter together—old women rushing up the chimneys & cows after them—ducks hiding themselves in coffee cups, & fat geese trying to squeeze themselves into pencil cases—at last the Mayor of Leeds will be found in a soup plate covered up with custard & stuck full of almonds to make him look like a sponge cake that he may escape the dreadful destruction of the Town... At last they bring the things which I ordered & then I spare the Town & send off in fifty waggons & under the protection of 10,000 soldiers, a file & a screwdriver and a ring as a present to Charles Lutwidge Dodgson from his affec^nte Papa.'[14]

この歯切れのよい剽軽さは，こちらで言えば江戸っ子の小咄に出てきそうだが，この剽軽さが，そのまま息子に受け継がれ，Carroll に次の詩がある。

Brother and Sister

"Sister, sister, go to bed!
Go and rest your weary head."
Thus the prudent brother said.

"Do you want a battered hide,
Or scratches to your face applied?"
Thus his sister calm replied.

"Sister, do not raise my wrath.
I'd make you into mutton broth
As easily as kill a moth!"

The sister raised her beaming eye
And looked on him indignantly
And sternly answered, "Only try!"

Off to the cook he quickly ran.
"Dear Cook, please lend a frying-pan
To me as quickly as you can."

"And wherefore should I lend it you?"
"The reason, Cook, is plain to view.
I wish to make an Irish stew."

"What meat is in that stew to go?"
"My sister'll be the contents!"
"Oh!"
"You'll lend the pan to me, Cook?"
"No!"

Moral: Never stew your sister.

Paul Schilder は，妹をシチューにしてやる，と意気まくこの詩や，不思議の国の赤の女王のことば「首をちょん切れェ！」の例を挙げて a particularly destructive writer …. We may merely ask whether such a literature might not increase destructive attitudes in children beyond the measure which is desirable,[15]極めて有害なところのある作家である…。このような読み物が，子供たちの中に度を越ぎると，いぢめの態度を増長させることにならないか，と問うている。しかし，Schilder が心配するま

でもなく，子供たちにははるかに，Carroll の詩と物語を楽しむ能力が備わっていた。1898年 Carroll が亡くなった時，*St.James's Gazette* 紙に投書した少女の手紙をきっかけにして，その年の10月には大勢の子供と「アリス」を愛読した人びとから1000ポンドが寄せられた。そして手紙を投書した Audrey Fuller の発案どうり 'The Lewis Carroll cot'[16]を永久維持基金を付けて Great Ormond Street 小児病院へ贈ったのである。こうしてみなが一つになってオードリーの夢を実現させたのも，アリスといっしょに「不思議の国」を喜んだ子供たちの優しい心の表われでなくて，なんであろう。

「極めて有害な作家」と主張する Schilder はまた，Carroll が子供の頃は11人のきょうだいの中でじゅうぶんに母親の愛情を受けなかったせいではないか，家庭が冷たかったのではないか，と推測しているが，事実は大変幸せな家庭であった。母 Francis Jane は Carroll がクライスト・チャーチ学寮に入るとすぐ47歳で亡くなった（1851年１月）。しかし彼女が幸せな娘・妻・母であったことを父のおばである Mary Smedley は同年２月13日付の手紙[17]に記している。"The last walk we took together, she spoke to me of her rare and exceeding happiness …she had been living precisely the life that she had most delighted to dwell upon in fancy, —& then she spoke most touchingly & beautifully of the responsibility incurred by a lot of so much happiness …「最後に二人で散歩した時，あの人は自分がこの上なく幸せだと，夢に描いてみたのとちょうど同じ生活をしてきたのだと話してくれました。それから心底優しく，感動的なことばで，これほどの幸せを受けて，大きな責任のあることを，話して居りました」。

母を失ってから19年後，妹の Mary Collingwood に男の子が生れた時に送った手紙は，短いが，彼が母から受けた愛情を偲ばせている。

I must write one line to *yourself*, if only to say ——God bless you & the little one now entrusted to you——& may you be to him what our dear mother was to *her* eldest son. I can hardly utter for your boy a better wish than that.[18]

彼の才能が，子供の頃家族雑誌という形で引き出されたのも，このように幸せな家庭があって出来ることである。

半年間続けた雑誌 *Useful and Intructive Poetry* のあと，*The Rectory Magazine*, *The Comet*, *The Rosebud*, *The Star*, *The Will-o'-the-wisp*, *The Rectory Umbrella*[19]を挿絵入りで，手書きの家庭回覧誌として次つぎに作った。

The first is the taste,
Which is meagre and hollow, but crisp:
Like a coat that is rather too tight in the waist,
With a flavour of Will-o'-the-Wisp.

これは *The Hunting of the Snark* の 'The Bellman's Speech' の一節，本物の snark を見分ける特徴を挙げて，その中に昔，家族雑誌につけた名前が顔を出している。O.E.D. によれば17世紀にはこの風変りな名前をつけたゲームがあった。

「不思議の国」に出てくるねずみの尻尾の話も，その原型は家族雑誌にある。こちらの挿絵の動物は犬であるが，キャロルはねずみによく似た長い長い尻尾[20]を描いて *Useful and Instructive Poetry* の中の *A Tale of a Tale* と題した詩に付した。

キャロルの場合とりわけ，子供の頃の着想が作品の中に生きている。Virginia Woolf がキャロルについて書いた一文に次の一節がある。'For some reason, we know not what, his childhood was sharply severed. It lodged in him whole and entire. He could not disperse it.[21]'「理由はわからないが，彼の子供の時期がそこだけすっぱり切取られて，そっくりその

まま彼の中に宿っていた。手離してそのまま，まとまりもなく薄れて消えてゆくままにはしておけなかったのである」'……since childhood remained in him entire, he could do what no man else has ever been able to do ——he could return to that world; he could re-create it, so that we too become children again. …it does not matter how old, how important, or how insignificant you are, you become a child again. …… Many great satirists and moralists have shown us the world upside down, and have made us see it, as gown-up people see it, savagely. Only Lewis Carroll has shown us the world upside down as a child sees it, and has made us laugh as children laugh, irresponsibly.[22]'「すぐれた諷刺家，道徳家で世の中をあべこべにして見せてくれた人は大勢いる。彼らは逆さまにした世の中を，大人が見る見方で，同情のない目を通して，見せてくれた。しかし世の中を逆さまにして，それを子供が見る目で見せてくれたのは，ルイス・キャロルひとりであった。子供のみる目で見て，子供のように屈托なく笑わせてくれたのは，キャロルひとりである」

ウルフのこのことばこそ，キャロルのキャロルらしさを言い得ている。

ものを書くのとは別に，Carroll には，ちょっとした発明・工夫の才能があった[23]。子供の頃は，鉄道ごっこのレールを敷いたり，人形劇のために芝居小屋を作ったり。同じ器用な指先がクライスト・チャーチの自室では，コレクションのオルゴールの故障を直し，時には曲の終った歯車を取り出して，逆に納めて鳴らしてみせる。彼はそれを 'music standing on its head'[24]とよんだ。「不思議の国」を地で行く話である。もっと現実的なところでは，来客の時にもいちいち手入れのかかる麻のディナーマットのかわりに，使い捨て出来るボール紙で代用したり，今でこそ珍しくないが，人数の多い食事の席で誰がどこに着席するか，テーブルの見取図に書き入れて 'an invention of mine' といって Macmillan 社に送っている。1871年の5月に8人の夕食会をやった直後のことであった。

Aidan Warlow の編による Jackdaw シリーズ137の *Lewis Carroll* の中には，The Wonderland Pastage Stamp Case というのが収めてある。Invented by Lewis Carroll, MDCCCLXXXIX と書いて，泣き喚く赤ん坊を抱いたアリス，ハンサムな小豚を抱いたアリス，それにチェシャー猫の絵がついている。これは4×3インチのパンフレットにした *Eight or Nine Wise Words about Letter-Writing* と組み合わせてオックスフォードの文具屋に並んだ。切手付きで1シリング，切手無しでは13ペンスであった。パンフレットの方は M.N. Cohen 編の *The Selected Letters of Lewis Carroll* の Appendix に入っている。切手入れは，一枚の厚手の紙に印刷してある型を切抜き，折り畳み，糊付けして箱形に組立てるもので，切手は種類別に差し込むようになっている。$\frac{1}{2}$d. 1 d. $1\frac{1}{2}$d. 2 d. $2\frac{1}{2}$d. 3 d. 4 d. 5 d. 6 d. 9 d. 1 s. とあり，7ペンスと8ペンスはないが1ペニーの口が2つあるから，合わせて12，挿し込み口ができる。

本にかけるカバーに書名を入れる，という今ではあたり前の工夫も，実は彼が考えついたことであった。Macmillan 社で *The Hunting of the Snark* の出版準備をすすめている1876年2月6日付の手紙にある。それまでの無地のカバーの背に本と同じタイトルをそのままか，或いは読みやすく斜めにして入れれば，その利点は，

The advantage will be that it can stand in bookstalls without being taken out of paper, and so can be kept in cleaner and more saleable condition.[24]

書名を見るためにいちいちカバーをはずさなくて済むために，本を汚されず，きれいなままで売れる，ということである。

器用な手先と工夫に加え，Carroll には計画に沿って事を運ぶ，用意周到なところがあった。「列車の旅には，分刻みの予定を立て，それが済むと必要な費用を正確に計算し，仕切りのある二つの財布に用途に合わせてお金を入れます。タクシーの，ポーターの，新聞の，お茶の，費用が即座に取り出せるので，発車間際のプラットホームで1ペニーの新聞を買うのに金貨を出して苛出つようなことを，Carroll は決してしませんでした」[25] これは Isa Bowman が綴った Carroll の思い出の一こまである。子供心に焼き付けられた印象であるだけに，具体的な出来事を通して語られている点が興味深い。

このように用意周到な細かい心配りと器用な手先，それに虚偽を許さない確かな目が，一つとなって，19世紀を代表する肖像写真家が生れた。写真家仲間には，彼の死が報道されてはじめて，Dodgson が「アリス」の作者であったことを知った人もある。'…the letter from Fredrick Hollyer, the portrait-photographer, who had "had the pleasure of knowing Mr. Dodgson for many years" but had been "*quite unaware* he was the author of *Alice in Wonderland* until a few days ago"…'.[26]

Helmut Gernsheim は *Lewis Carroll–Photographer* の前書きで「彼の想像力の豊さには驚いた。一枚一枚の写真にそれぞれ人物の人柄がよく出ている。彼の撮った写真は，見れば見る程，天才の業と，納得がいく。19世紀の写真界に彼ほどの人は少い」[27] と書いている。

Carroll が初めて写真機を買ったのは，1856年3月18日のことで，クライスト・チャーチの学生 Reginald Southey と共に，ロンドンのシャーロット通りにある Ottiwell というメーカーを訪ねて，カメラ，レンズ，その他の附属品を合せて，15ポンドで注文した。写真に興味を持ったのは，母方のおじ Skeffington Lutwidge や学生 Southey がカメラ一式を抱えて写真を撮りに出歩くのに付合ったのが，きっかけであった。コロジォン法と呼ぶ，湿板を使った当時の技術は，撮影から現像まで，細心の注意と忍耐が必要であった。そしてただ写すのではなく，その人らしく，その人柄を写し出すには，Gernsheim の言う，想像力豊かな写真家でなければできない。写真はやがて，Carroll にとって単なる趣味を越え，自己を芸術的に表現するための手段となる。

芸術的効果を挙げるには，どうすればよいか。1860年のロンドンの写真展に関する Dodgson の小論がある。その中に次のような指摘[28] がある。光線の調節が大切であること，数名を撮るときにはどこか一ケ所に視線を合わせるとよいこと，一人だけの肖像画では手の配置が難しいこと，出品の作品の中には人物に生彩がなく無意味に見えるものがある，構図が硬く，決まり切っている，たいていの被写体が諦めの体で憂鬱に見える，と遠慮なく評している。彼が心を配ったのは，撮ってもらう人の姿勢が自然であることは勿論，寛いで，知らぬ間に撮られたように撮したい，ということであった。晩年になって，こう書いている。「長年写真をやってきて，均り合いの物差しというものが身についてきた。写真をやってわかったのだが、たいていの画家が，子供の足を描くのに，小さく描きすぎている。彼らは美というものに何かしら因習的な観念をもっており，それはあるがままの姿とはちがっている」[29]

Carroll の写真といえば，Alice Liddell や小さい女の子の写真かと思われる。確かに彼には，小さいものたちを愛し，その飾らない美しさを捉えて写し出すことが楽しみであった。Eleanor Graham[30] は次のように書いている。"Charles Dodgson was a sincere christian and felt his religion deeply. Unlike many of his contemporaries, he believed in original perfection rather than original sin, and felt a particular pleasure in the companionship of children 'on whom no shadow of sin and but

the outermost fringe of the shadow of sorrow has yet fallen.' In a letter[31] to a friend, he wrote: 'A child's first attitude to the world is a simple love for all living things.'

Carroll は，人は生れながら原罪の下にある，ということよりも，むしろ本来完全なものとして創られている，ということを信じていたので，まだ罪も深い悲しみを知らない子供の中に，汚れのない美しさ，巧まない美しさ，を見たのであろう。

しかし彼は子供だけを撮したわけではない。好奇心の向う所，さまざまな人と物が対象となった。人の骸骨，魚の骨格，寺院，建物，絵画，彫刻，家族，友人，同僚，中でもクライスト・チャーチの知己を介して著名な人びとの肖像写真[32]を残している。画家のホルマン・ハント，J.E. ミレー，ダンテ・ガブリエル・ロセティ，アーサー・ヒュー，彫刻家のアレグザンダー・マンロー，聖職者ではカンタベリ大司教 C.T. ロングレー，ヨーク大司教 A.C. テイト，リチャード・ベンソン，文学の方面では，「アリス」の出版をすすめてくれたジョージ・マクドナルド，詩人アルフレッド・テニスン，クリスティナ・ロセティ，批評家ジョン・ラスキン，科学者のマイケル・ファラデー，ウィリアム・ドンキン，サー・ヘンリー・アクランド，オックスフォードの同僚で近代語学科の教授でサンスクリット語講座を持ったマックス・ミューラー，このミューラーには44歳の時の若々しい写真が残っている。その他当時の舞台女優，エレン・テリー，D.G. ロセティやマンローのモデルになったドイツ人のヘレン・バイァー，デンマーク皇太子フレデリック，プリンス・オヴ・ウェールズ，首相のソールズベリ卿。二，三，名前を挙げるに止めるが，自身では有名人扱いされるのを嫌って写真や署名を他人にやりたがらなかった Dodgson[33]も，著名人の写真を撮り署名[34]をよく集めている。

写真を始めたのは1856年，その時母は既に亡くなっていた。しかし翌年12月に発表した *Hiawatha's Photographing* で写真家 Dodgson と被写体の彼の家族が，ユーモラスにうたわれている。その大仰な語り口で描かれた一家の主婦は，せわしなく，女らしく，幸せな，いつの時代にも変らない婦人の姿に見える。Longfellow が彼の 'Hiawatha' を発表したのが1855年，その歯切れのよい 'Kalevala'[35]に習った韻律を，そのまま借りて使っている。"The greatest living master of language" と Longfellow を讃え，その平易で澱みなく流れる韻律を取り入れたのである。Carroll が，ことばのもつ音楽性を重視したことは，妹の Mary に宛てた1892年7月10日付の手紙に，窺える。'Good English, and graceful arrangement, are higher qualities, not attainable by rule, but only by having read much good English, and so having got a musical "ear", so to speak.' すぐれた英語，それに格調のある語の配列は，高度の資質であって，文法の規格によってできるものではない。優れた英語を多く読み，音楽的な「耳」を養うことによって身につけるものである。

ことば遊びの名人と言われるキャロルは，音声としてのことばの効果に関心を持っていたのである。

この手紙の後半には，"今，書物で使われている悪い英語の責任は殆どが新聞にある。今日の小説に，正しい英語で書かれたものが何と少くないことか！優れた英語で書かれた本を探すには，50年以上前に戻らなければならない。"と続けて，"That is one reason why I like reading the older novels —Scott's, Miss Austen's, Miss Edgeworth's, etc. —that the *English* is so perfect. We have one living novelist, whose English is *lovely* —Miss Thackeray. 優れた英語を書く作家としてウォルター・スコット，ジェイン・オースチン，マリア・エッジワースそしてサッカレーの娘 A.I. リッチーを挙げている。

Notes and References

1) 1881年10月18日(火)の日記に，"I have just taken an important step in life, by sending to the Dean a proposal to resign the Mathematical Lectureship at the end of this year. *The Diaries of Lewis Carroll* ed. by R.L. Green.

2) John Skinner, *Lewis Carroll's Adventure in Wonderland.* in *Aspects of Alice* p.300.

3) Morton N. Cohen(1982) p.217

4) Isa Bowman, *Lewis Carroll as I knew Him* p.72.

5) "…since the death of Lewis Carroll his characters have consolidated their hold on the imaginations of men, women and children throughout the world, to a degree unattained by the characters of any other author with the exception of Shakespeare, Dickens, and, perhaps, Sir Arthur Conan Doyle." Derek Hudson, *Lewis Carroll* p.29.

6) R.L. Green (1971) p.389.

7) Isa Browman (1972), p.14.

6) Derek Hudson (1981), p.233.

9) "I take this opportunity of giving what publicity I can to my contradiction of a silly story, which has been going the round of the papers, about my having presented certain books to Her Majesty the Queen. It is so constantly repeated, and is such absolute fiction, that I think it worthwhile to state, once for all, that it is utterly false in every particular: nothing even resembling it has ever occurred." *Symbolic Logic* p.49.

10) Dr. Henry Parry Liddon (1829–90), "one of Dodgson's closest and most valued friends and they agreed on most issues (religion, art, archtecture, women's education) while disagreeing on others (e.g. the teatre)." *Lewis Carroll at Christ Church* p.21.

11) Morton N. Cohen (1982) p.220.

12) D. Hudson は文献リストの中でこの本に，incomplete but useful と付している。

13) D. Hudson (1981) p.35.

14) *ibid.*

15) Paul Schilder (1938) in *Aspects of Alice* p.292.

16) Derek Hudson (1982) p.22.

17) R.L. Green (1971) p.29.

18) D. Hudson (1982) p.60.

19) このうち Carroll が主に書いたのは，*Useful and Instructive Poetry, The Rectory Magazine, The Rectory Umbrella* であった。*Diaries of Lewis Carroll* vol.1, p.21.

20) Derek Hudson (1982) p.55.

21) Virginia Woolf (1939) in *Aspects of Alice* p.48.

22) *ibid.*

23) M.N. Cohen (1974) p.3.

24) Derek Hudson (1982) p.183.

25) Isa Bowman (1972) p.22.

26) Derek Hudson (1982) p.24.

27) Helmut Gernsheim (1969), Preface to the First Edition.

28) The Rectory Umbrella (1971) pp.178–185.

29) M.N. Cohen (1974) p.8, (1982) p.260

30) E. Graham (1974) p.19.

31) M.N. Cohen (1982) p.210

32) 以下に挙げるものは Colin Ford 編 *Lewis Carroll at Chist Church* と H.Gernsheim 編 *Lewis Carroll—Photographer* より拾い出した。

33) F.H. Atkinson に宛てた1881年の手紙の中に '…has been bullied ever since by the herd of lion-hunters who seek to drag him out of the privacy…"

34) R.L. Green (1971) p.163.

35) *Kalevala* は，フィンランドの国民的叙事詩で，'Land of Kaleva' の意味。詩形は強弱4詩脚の頭韻。Longfellow の *The Song of Hiawatha* はこの詩形を基にして作られた。Carroll は Hiawatha's Photographing の詩の前書きに [In an age of imitation, I can claim no special merit for this slight attempt at doing what is known to be so

easy. Any fairy practised writer, with the slightest ear for rhythm, could compose, for hours together, in the easy running metre of "The Song of Hiawatha.…] と印して韻律より，内容に注目して欲しいと言っているが，韻律を無視したということではない。

36) M.N. Cohen (1982) p.226. マリア・エッジワース（1767—1849）は，ウォルター・スコット（1771—1832）と交流があり，スコットは彼女を高く評価していた。彼女の作品 *Belinda*（1801）はまた，ジェイン・オースチンの激賞を受けた，というから，この三人には合い通じるところがあったのであろう。Miss Thackeray は，W.M. サッカレーの娘，Anne Isabella Ritchie (1837—1919) のことである。

Bibliography

Bartley, Ⅲ., William Warren ed. *Lewis Carroll's Symbolic Logic* (1977) Potter.

Bowman, Isa, *Lewis Carroll As I Knew Him* (1972) Dover Publications.

Cohen, Morton N., *Lewis Carroll's 'Black Art'* (1974) in *Lewis Carroll in Christ Church.*

_____, *Alice: The Lost Chapter Revealed* (1977) Telegraph, Number 51.

_____, *The Selected Letters of Lewis Carroll* (1982) Papermac.

Ford, Colin ed., *Lewis Carroll at Christ Church* (1974) National Portrait Gallery.

Gernshelm, Helmut, *Lewis Carroll——Photographer* (1969) Dover Publication.

Goldschmidt, A.M.E., *Alice in Wonderland Psychoanalyzed* (1933) in *Aspect of Alice* pp.279–282.

Graham, Eleanor, *How the Story was Told* in Webb ed., (1974).

Green, Roger Lancelyn ed., *The Diaries of Lewis Carroll* 2vols. (1971) Greenwood Press.

Hudson, Derek, *Lewis Carroll——An illustrated biography* (1982) Constable.

Longfellow, Henry Wadsworth, *The Song of Hiawatha* (1968) Bounty Books (a facsimile reprint of the 1890 edition).

Phillips, Robert ed., *Aspects of Alice* (1972) Victor Gollancz.

Shilder, Paul, *Psychoanalytic Remarks on Alice in Wonderland and Lewis Carroll* (1938) in *Aspects of Alice* pp.283–292.

Skinner, John, *From "Lewis Carroll's Adventures in Wonderland"* (1947) in *Aspects of Alice* pp.293–307.

Strong, T.B., *Lewis Carroll* (1898) in *Aspects of Alice* pp.39–46.

Warlow, Aidan, compiled, *Lewis Carroll* Jackdaw No.137, Jackdaw Publications.

Webb, Kaye ed., *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking Glass* (1974) Puffin Books.

Woolf, Virginia, *Lewis Carroll* (1939) in *Aspects of Alice* pp.47–49.

The Complete Works of Lewis Carroll with an introduction by Alexander Woollcott, The Modern Library.

The Rectory Umbrella and Mischmasch (1971) Dover.